

音韻変化の証拠としての無核型複合動詞¹

Unaccented compound verbs as an evidence of a phonological change

児玉 望

KODAMA Nozomi

1. はじめに

「東京式アクセント」とまとめられることのある外輪式・中輪式・内輪式は、もっとも広範囲に分布する日本語位置アクセントであり、3つの類型でアクセント核の有無と位置の大部分が共通である。筆者は、この中で九州と北東北の外輪式が、名義抄式を上げ核体系とみた場合の核の位置と同じ位置に核をもつことに着目し、位置アクセント祖体系としてこの位置に核をもつ上げ核体系を仮定し、上野善道(1975)に準じるアクセント核の種類の変化と、無核化・有核化を組み合わせたアクセント変化の再建を試みてきた。いわゆる「山の移動」のような音声変化を、アクセント核の位置ではなく、アクセント核の音声的実現（の変異幅）の変化として説明する試みである。

外輪式・中輪式・内輪式は、名義抄式の名詞の類統合の違いに基づく分類であるが、この違いは以下のように概略的にまとめることができる。

- (1) a. 1-2類：1-1/2類（無核）外輪・中輪、1-2/3類（有核）：内輪
b. 2-2類、3-2類：2-1/2類、3-1/2類（無核）外輪、2-2/3類、3-2/4類（語末核）中輪・内輪
c. 3-6類：3-6/7類（語頭核）「外」外輪、3-1/6類（無核）「内」外輪・中輪・内輪

(1)aと(1)bは、内輪・中輪体系での有核化、(1)cは無核化という改新を筆者が想定する分布である。児玉(2022)では、1-2類、2-2類、3-2類の祖体系に、下降に続く上昇という、文節内に音調の谷（[L#²]）あるいはくぼみ音調（[L#]）を生じるような境界声調を立て、この不安定な特徴による弁別がどのように解消されるかに応じて、(1)aと(1)bのそれぞれについて、上げ核体系の

¹ 本研究は JSPS 科研費（課題番号 15K02484）の助成を受けたものである。本研究は第 36 回日本音声学全国大会（2022 年 9 月 24 日・神戸学院大学）での口頭発表「いわゆる複合動詞「山田の法則」の通時的説明の試み」での説明が不十分であった部分を中心に、構成を改めて加筆したものである。

² 本稿で使用する記号は以下の通り。[: 上昇] : 下降 [: 後続音節上昇調] : 先行音節下降調

H : 高 L : 低 # : 音韻語境界 * : 核の置かれる音節又は拍の右側に付す。

なお、本稿で数多く引用した、先行研究からの用例は、分節音については原文を用いることを原則としたが、上記の記号を用いたアクセント解釈は筆者が付加したものである。誤解釈は筆者に責任がある。

段階での有核化・合流と、降り核化に伴う有核化・合流の2つの過程が想定できることを論じ、「外輪」「中輪」「内輪」は類型であり、系統分類と見るべきではないとした。

(1)cは、平子達也(2017)が3-7b類と合わせて、中輪式・内輪式だけでなく、出雲・三遠の「内外輪式」も含めた共通の特徴として通時的説明を試みた分布である。児玉(2020)では、これがそれぞれの体系での改新であり、核音節（あるいはモーラ）での上昇・下降が弁別的である昇り核・降り核から、次音節での下降が弁別の特徴となる下げ核化に際して、次次音節にHが後続しなければならないために次音節側で下降の実現形が現れにくかった位置での非核化であると論じた。降り核の非核化と昇り核の非核化はそれぞれ独立の改新であり、この場合も系統分岐につながる改新ではなく、結果が同じ合流を引き起こした可能性がある、ということになる

しかし、詳しく見ると、降り核からの下げ核化と昇り核からの下げ核化では、アクセント変化として異なる点がある。降り核からの下げ核化は、核音節の降り核による下降が次音節まで継続し、むしろ次音節側の下降が弁別的になる、という、いわゆる「山の一拍ずれ」の変化である。「山の一拍ずれ」が阻止された結果としての無核化が起きるのは、この核が語頭核だったからである。

これに対して、昇り核から下げ核への変化は、核の引き起こすピッチ変位の方向が変わる変化である。核による上昇に引き続いて、自由変異あるいは環境異音として可能であった次音節側の下降が弁別特徴に変わる、というものであり、下降が]L[に帰着するような、次次音節にHが要求される環境の核であれば、3音節以上の語の次次末音節以前の位置の核が非核化する、と想定される。3-6/7b類の語頭核の非核化はその1例である、ということになる。

核のピッチ変位の逆転に伴う非核化としては、上げ核の降り核化に伴う無核化の類例があると考えられる。上野(1985)で記述されている伊吹島アクセントでは、名義抄体系での上げ核のうち、語頭核は低起式、非語頭核は下降式に対応しており、2-2類や3-2類の境界下降]L[に対応するとみられる核とは合流していない。これはおそらく、降り核として核音節の前が高起化しても、本来の上げ核としての[が後続しうる位置での不十分な下降が、境界下降]L[との弁別を保ったためだろうと解釈できる。周囲の讃岐式アクセントは、この段階を経て名詞2-1/3類、3-1/4/5類や、名義抄式では次末核型だったとされる2類動詞の3拍以上の語形が無核型として合流したと考えられる。語長に関わらず起きた非核化である。

(1)cのほかに降り核を経た下げ核化による非核化の結果として解釈できる可能性があるものとして、本稿では、中輪体系で報告されている無核型の複合動詞を取り上げる。東京方言の場合、動詞+動詞のタイプの複合動詞が無核型となりうるのは、前部要素が2類動詞、つまり

有核型の場合にはほぼ限られることが知られる。山田美妙の『日本大辞書』の音調解説に取り上げられていることから「山田の法則」と呼ばれることがあるが、共時的な形態変化規則として類推的に適用された可能性は否定できないとはいえ、有核型に限って適用されるということから、音韻変化としての「核の非核化」の結果として生じたものに端を発するという仮説を導くこともできる。本稿では、3-6/7b類の無核型化と、2類動詞を前部要素とする無核型複合動詞の出現にどんな相関があるかを検証することを試みる。

2. 複合動詞アクセントの再建仮説

本稿では、上げ核位置アクセントの祖体系での単純動詞の再建形としては、屋名池誠(2004)の平安時代京都方言アクセントの分析を基に、付属語バとズをアクセント上自立したものと仮定して修正した児玉(2022)を使用する。1類動詞は語長に関わらず無核型、2類動詞は1音節語形が上昇調無核型、2音節以上で次末核型、連体形と未然形では境界声調が現れないのに対し、それ以外の活用形では語長に応じて][# または]L[# の境界声調を再建する。アクセント上自立せず、自らのアクセントを持たない付属語（いずれも未然形接続のヌ、ム、ス／サス、ル／ラル、シム）が接続した場合は、1アクセント単位として融合して、類に応じそれぞれ無核型、次末核型となる系列性を示す。

これに対して、複合動詞の後部要素は自らのアクセントを保ち、2アクセント単位として実現するのが祖体系であったと考える。このような実現形は、たとえば東京方言でも コ*]ビヘツラ*]ウ、オソ*]レウヤマ*]ウ といった、並列タイプの複合動詞に残存している。

2類動詞を前部要素とする複合動詞に起きたアクセント変化として中輪式を含め多くの体系に起きたと考えられるのが、後部要素の核の非核化である。後部要素が自らのアクセントを失い、無核型となる。この段階では1アクセント単位として統合しているとはいえないと考える。後部要素が本来無核型であるような複合動詞では、2アクセント単位としての実現形との区別がない。東京方言の例では、イ*]ミキラウ は並列タイプであるから2アクセント単位と見てよいとして、オソ*]レイル、イタ*]ミイル、コ*]キツカウ といった残存形はどうだろうか。核が1個に収まっている、という点では1アクセント単位とも見ることができるが、動詞のアクセント単位としては単純動詞とは明らかに異なる複合動詞独自のアクセント型である。この状態と比較可能なのは、体言と付属語から成る文節のアクセントである。中輪式・内輪式では2拍以上の付属語は自らのアクセントを持っているが、有核の体言に接続する場合には、付属語側に何らかの強勢を置くような2句構成にしない限り、無核型と区別のないピッチ形となる。体言文節アクセントでは、体言側は自らのアクセントを保持するし、また、境界声調をもつ型であ

れば境界声調が現れる。同様に、前部要素に核が保持されている複合動詞では、前部要素の2類動詞は動詞語形としての性質を保持していると考えられる。

これに対して、無核型の複合動詞は複合動詞全体として1単位化して、1類の単純動詞と同じアクセント型となっている。前部要素は核を失い、動詞語形としての独立性を失う変化を経ていることになるが、この変化が、先に述べた後部要素の無核型化に引き続いて比較的早い時期に起きていたために、3-6/7b類と共通の音韻変化を経た体系がある、というのが本稿の仮説である。この仮説では、より一般的な2単位形と、一部の語にのみ起きた単純動詞としても可能なアクセント形をもつ1単位形との交替が、上げ核祖体系の段階で生じており、この過程で一部の体系では音韻変化として前部要素の核を失ったと考えることになる。このために、日本語諸方言の位置アクセント体系でどのような複合動詞形成が共存しているかを、「法則」としてではなく過去の体系の痕跡である可能性のある例外的な語形として無核型複合動詞が残存している場合も含めて比較し、前部要素の核の脱落が、形態変化であるとするべきか、ある条件下でおきる音韻変化であるかを見極めなければならない。そのために、本稿ではアクセント記述のある辞書類を含む語彙リストのある先行研究をとりあげ、そのアクセント記述について、2単位形と1単位形の併存あるいは選択という観点から分析して比較する、という方法をとる。また、『全国方言資料』と国語研『方言談話資料』『日本語諸方言コーパス』の談話音声資料で無核型複合動詞の出現例、特に2単位形との交替例があるものも調べた。この方法では「無核型複合動詞が出ない」という証明にはならないが、今後の研究の参考にはなる。

無核型複合動詞が2単位形からの1単位化で音韻変化として生じるとしたら想定できる変化の仮説を述べる。

上げ核体系や現存する昇り核体系では、有核型が低起となるのに対し、無核型は高起（あるいは非低起）であったと考えられる。さらに、1単位化の結果として、動詞連用形が境界声調を保っている体系も含め、この境界声調³が削除されるとすると、前部要素が2類動詞であり次末核型の場合には、境界の近傍に、L*[H(#)H、昇り核化すれば[*HH(#)Hという、連続が現れることになる。上げ核や昇り核の体系でも核による上昇に引き続いて下降が生じうるが、境界音調の有無による弁別が維持された体系であれば、境界近傍まではHの平進が続かなければならない。これは、名詞3-6/7b類と同じく、下げ核化に際して非核化が起きる環境となる。降り

³ 京都方言では鎌倉時代の講式アクセント以降、境界下降となりこれがのちに核と合流したことがわかっているが、他の体系でどんな音調であったかはわからない。外輪式は境界声調の有無による弁別を失ったが、境界声調そのものは失っていない（すべての語が境界声調をもつ）か、あるいは新たに発生した可能性があるとする。

核化を経ての下げ核化であれば、非核化が起きるのは前部要素が2拍で核が語頭核の場合だけであるが、昇り核化を経た下げ核化では前部要素の語長に関わらず無核型の複合動詞となる。

この音韻変化仮説が否定されなければ、前部要素の語長に関わらず無核型複合動詞がある体系は、昇り核化を経て下げ核化する、という変化を経たと考える有力な根拠になると考える。上げ核から下げ核への変化の経路は、次音節側から核音節側に弁別特徴が移る昇り核化のいずれかであると考えられる。上げ核から直接下げ核に変化するとすると、中間段階として核次音節が上昇しても下降してもよい、というピッチアクセント的でない体系を想定しなければならないからである。地理的に離れた地域に共通の特徴が見いだされるとしたら、予想されるのはこのような二者択一的な変化である。

3. 『日本大辞書』／『新明解国語辞典（第7版）』の東京方言

いわゆる「山田の法則」が言及されている「日本音調論」は、『日本大辞書』の附録として掲載されたものであるが、後の「山田の法則」とは少しずれがある。そもそもこの部分は複合動詞を論じているのではなく、日本語の「原音」は3拍止まりであり、4拍以上の「語根」は複合的な構成であって、その成分に応じて音調を決定するような「其自然ノ法則ハ驚クホド」であることを、複合動詞とその名詞化形を例に論じている部分である。この中で複合動詞が無核型（全平）とされているのは、前部要素が2拍の有核型の場合だけである。前部要素が1拍の例は、「ゐ」だけであり、後部要素の音調が維持されるとし、3拍の有核前部要素を持つ場合は、（後部要素は無核統一の）2単位形とみられるピッチ形が記述されている。この記述の通りに19世紀以前の東京アクセントでは2拍前部要素の語頭核のみが非核化したのであれば、本稿の仮説では昇り核化ではなく降り核化を経た下げ核化ということになる。ただし、3拍前部要素で「山の一拍ずれ」が阻止された形跡はないし、また、前部要素が語頭核となる「まいり」のような3拍語形でも2単位形であり無核型となるという予想とは合わない。

『日本大辞書』の辞書項目には複合動詞も含めアクセント表記がなされているものは多いので、例として「おもひ」を前部要素とする複合動詞見出し語35例の記述をみると、「全平」、つまり無核型とされているものは1例もなく、2単位形とみられる「第2上」が15例を占める。1単位に統合して次末核型となるアクセントは、「おもひあはセル(第6上)」「おもひいだス(第2上、又、第5上)」「おもひみだれル(第6上)」の3語である。ただし、「おもひ～」ではアクセント表記を欠く語が18例と、非常に多い。「おしかへス(第3上)」を除き基本的に次末核型になる「おし」を前部要素とする複合動詞見出し語27例では、アクセント表記がないのは5例のみで、いずれも「おしこム」「おしこめル」のように「古体」と「近体」がそれぞれ見出しとして立っているものの「古体」側の語である。一方、名詞「おぎなひ」では(…、又、第3上)のよう

に、アクセント表記が明示されていない場合に通常付されている(…)が「全平」の異表記として用いられている例があることを考慮すると、アクセント表記を欠く18例には無核型のアクセント形がかなり含まれているとみななければならない。

アクセント表記の充実した『新明解国語辞典』第7版に記載の「おもい〜」のうち19例の見出し語が『日本大辞書』と共通であるが、これらは、「おもいみだれる」1例を除き、すべて無核型が可能なアクセント型に含まれている。一方、『日本大辞書』には記載のない17語のうち、12語までが、次末核型のみを可能としている語である。この第7版では、いわゆる「山田の法則」に従う無核型複合動詞を「古い世代」のアクセントとして、「後の世代」では前部要素の型に関わらず複合動詞は後部要素有核型に単一化するというアクセント変化を認め、アクセント記述でも「30 (丸付き数字)」のように、併用の場合でも有核型のアクセントを先に書くようになっている。『日本大辞書』以降に一般化した新しい複合動詞ではこの単一化した後部要素有核型のみが認められる、とも読み取れる分布になっている。いわば「もっと古い世代」にあたる2単位形式については、「おもいいたる」「おもいきる」「おもいしる」「おもいめぐらす」の4語にのみ第3の交替形として併記される。

「日本音調論」の記述通りに前部要素が3拍の場合が2単位形のみであったとすると、2つの辞書が刊行される100年余りの間に、前部要素が3拍の無核型複合語が発生して一般化し、やがて衰退する、という目まぐるしい変化があったと考えなければならない。また、『日本大辞書』の「おもひみだれる(第6上)」のような次末核型の例からは、現在の単一化がこの時代にすでに始まっていたことになり、無核型化と次末核型化という二つの変化が並行して進行して、最初優勢であった無核型化が次末核型に敗れ去る、という解釈になる。それよりは、2単位形と無核型の何らかの併存から、まず2単位形が(前部要素2拍の複合語と同様に)無核型に置き換えられる変化が起き、この過程で次末核型への置き換えが優勢となって現在の併存状態が生じていると考えた方がよい。特に重要な問題は、「併存」である。二つの形に何らかのゆるやかな使い分けがあったとは考えられないだろうか。

この併存の記述に当たって、『新明解国語辞典』が次末核型を優位とみる表記を採用したことは先に述べた。それでも、「みつける」「みすごす」「おちつく」のように無核型だけを認めている見出し語や、前部要素が1拍の「み〜」のうちの「みあげる」「みわける」「みおくる」「みかねる」のように、無核型が先行する「03」として記載されているものも少数ながら残っている。これらの動詞の共通点は、複合語を構成する動詞が動詞全体の語義にどのように関わるかが不透明である、という点である。「みつける」と「いいつける」「かきつける」「しつける」の間に意味的な共通性を見出すことは容易ではない。このような動詞では、「単一化」

を適用して次末核型で発音した動詞が、意味的にもっと透明な、たとえば「おちつ*く」であれば、「落ちて着地する」といった意味となり、「何かの変化の結果として動揺しない状態になる」という点にのみ特殊化した意味をもつ無核型動詞「おちつく」とは別の動詞のように感じられてしまうということで「無核型」だけが認められているのだと考える。逆に言えば、複合語アクセントの「単一化」は、「複合語としての意味的透明性をある程度まで保証する」点で無核型とは異なる、とみることができる。この場合の「透明／不透明」は二項対立ではなく、規則的な複合が可能ないわゆる構文タイプや並列型の複合動詞のように完全に透明なものから、限定・特殊化の在り方に応じてさまざまな度合いがあり、一方の極に「一語化」（たとえば「みとめる」）がある、というような連続的な尺度であるとみる。

このような考察に基づいて、『日本大辞書』の体系を見直してみる。前部要素が有核動詞の3拍語形の場合は、意味的透明度に応じて、透明度の高い2単位形と、透明度が下がって一語化する方向の無核型複合動詞が併存している状態である。この無核型複合動詞が2単位形を置き換える方向の変化がその前の段階から進行していて、前部要素が有核動詞の1・2拍語形ではこの変化がほぼ完了していたと考える。語長の短い動詞は長い動詞よりも使用頻度が高く、文脈（たとえば目的語）に応じて意味が特殊化しやすいことを考慮すると、無核型複合動詞がこの場合にはもともと多く、その類推から、透明度のより高いものまで無核型化していったと考える。この状態で、2単位形の置き換えに参入してくるのが次末核型化した複合動詞である。2単位形のもっていた高い透明度を保持する言い換えとして、無核型より好まれたと考えられ、2単位形だけでなく、前部要素が1・2拍で無核型になっていた複合動詞まで、単一化した「複合語アクセント」として採用され、さらにより不透明な複合動詞までカバーし始めている、ということではないだろうか。

このように、東京方言の先行段階では有核動詞前部要素の語長に関わらず複合動詞の2単位形と無核形が併存していた、という仮説は、東京方言の周囲の関東・東海・甲信地方の談話音声資料で観察される2単位形と無核形の併存と比較しても、蓋然性が高いと考えることができる。しかし、問題は、なぜ前部要素が有核動詞の時にのみ、透明度、つまり「一語化の度合い」に応じた2形があるのかである。複合動詞のアクセント変化は音韻変化ではなく形態変化であり、類推的な型の移行とみるべきであるとは言え、類推の元になるような無核型の発生は、音韻変化であった可能性を否定するものではない。2節で提示した複合動詞アクセントの再建仮説は、非核化の条件として、境界音調の削除という一語化の方向での音韻変化を仮定している点で有力な仮説であると考えられる。さらに重要な点は、この変化が地理的には中央式体系によって隔てられた西日本の体系にも観察される、という点である。

4. 『山陰地方のアクセント』の中輪・(内) 外輪式方言

広戸惇・大原孝道(1953)は、山陰地方の中輪・(内) 外輪両体系とその境界地域、および隠岐全域のアクセントを詳細に記述した著作であるが、複合動詞についての記述も含んでおり、また、対応語彙リストには複合動詞の例も多い。児玉(2022)の中国地方の諸体系の分析は、この記述データに基づくものである。

中輪体系の記述(上掲書:44-47)は、主として石見(浜田)と因幡(八束)に拠っているが、複合動詞については、浜田方言はほぼ東京方言と似た、後部有核の単一化が起きていることを述べるだけであるのに対し、八束方言については、後部要素が無核化した2単位形が、前部要素が無核動詞の場合と有核の場合の2形を持ち、さらに、前部要素が1・2拍の有核型動詞では無核型の交替形をもつとしている。交替形を持つ場合の語彙リスト項目では、語彙に応じて2単位形か無核型かのいずれか一方が掲載されている場合がほとんどである。2単位形の核の位置は、前部要素の長さが1拍か2拍以上かで異なり、1拍の場合は前部要素が無核では境界次音節、有核では境界音節、2拍以上では前部要素が無核で境界音節、有核では次末音節という記述となっている。

複合動詞前部要素が有核動詞の場合、1・2拍語形に限るとはいえ、2単位形と無核型をもつという点は、東日本の中輪体系と共通である。有核型の1・2拍の前部要素は連用形の核を保存するものとしめないものがある、という、日本大辞書以前の段階として想定した併用である。無核動詞を前部要素とする複合動詞のアクセント型は、1種類しかない点は東日本と同じであるが、核が単純動詞と同じ後部有核型ではなく、前部要素が1拍の場合を除き、単純動詞ではありえない複合動詞固有の、おそらく2単位形式とみられる有核型となる点が東日本とは異なる。児玉(2022)では、中国地方では上げ核体系の段階で、境界下降]L[が名詞では[に変化して語末核型に合流したのに対し、動詞連用形の付属語接続形では境界下降が平準化する変化を経たという仮説を提案したが、無核動詞連用形に付属語が接続しない場合にはこの平準化が起きず、何らかの境界音調が残存したとみられる。名詞と同じく上昇が残った場合、これが名詞と同様に(上げ)核に転化する、あるいは、核ではない境界音調として残るという二つの可能性が考えられる、後者であれば、有核動詞を前部要素とする場合の再建仮説と同様、無核動詞を前部要素とする場合についても境界音調の削除による交替形が想定できるはずであるが、これがないということは、上げ核語末核として昇り核化を経て語末下げ核となったが、1類動詞の1拍連用形では昇り核化により上昇開始が早まるのが(もともと去声類の2類動詞1拍連用形との弁別を保つために?)妨げられたために、下げ核化に伴って核が後部要素側に一拍ずれている、という解釈をとることになる。

無核複合動詞となるのが前部要素が1・2拍の語頭核型連用形をもつ場合に限られる、という点は、昇り核化を経た下げ核化の根拠としては弱い。降り核化を経た下げ核化でも同様の無核化が予想されるからである。しかし、「日本音調論」の記述の解釈に関して述べた、3拍語形を前部要素とする複合語の相対的に高い透明性によって無核交替形が現れないという説明も可能であり、このことから昇り核化を経た下げ核化が否定されるとは考えない。

関連して興味深いのは広戸・大原(1953: 90-91)の出雲方言の複合動詞である。この方言では、2単位形ではなく、前部要素が有核であるか無核であるかに応じて、複合動詞全体が(後部)有核であるか無核であるかが決まる、という系列化された複合動詞構成が規則的である。しかし、特に、出雲市など西部地域では、前部要素が有核型動詞の場合に、2単位形と、系列化された1単位形が併用されているとする。さらに、語彙リストでは、2単位形だけでなく、前部要素が1拍の「ミ～」(28語)のうち出雲市で16語、松江市で9語のほか、出雲市でタタ(*)キダス、タチアガ(*)ル、タチコメ(*)ル、タチノボ(*)ル、タチハタラク、ツカ(*)ミアウ、ツクリダス、トオリコス、トリタテ(*)ル、ハナ(*)シアウ、ハライコム、フキナガス、マチアワ(*)ス、マチコガレ(*)ル、マチワビ(*)ル、ヨミオワルといった語に無核型化のアクセント形あるいはその交替形が現れている。松江市でも、タチイ(*)ル、タチコメ(*)ル、タチノボ(*)ル、タチハタラク、ハライコム、マチアワス、マチワビ(*)ルに無核型の記載がある。

系列化されたアクセント単位の拡大は、九州など語声調体系のものがよく知られているが、用言についてはアクセントをもたない付属語を接続する場合の前部要素支配型のアクセント決定として、位置アクセント体系でも継承されている生産的なプロセスである。後部要素がアクセントを失った複合語構成に類推的に適用されることはじゅうぶんに考えられる。これが意味的に透明な構成をもつ複合動詞構成の改新であるとすれば、系列化に反するような前部要素に有核動詞をもつ無核型複合動詞の、少なくとも一部は、それ以前に成立していた一語化の進んだ複合動詞のアクセント交替形である可能性がある。語彙リストには前部要素が3拍語形のものも含まれており、出雲方言でも昇り核化を経た下げ核化によって非核化が生じた可能性を示唆している。

広戸・大原(1953)で記述されている隠岐方言について、児玉(2022)は、中輪・(内)外輪と異なり、昇り核化した段階で、名詞3-6/7a類だけでなく祖体系の語頭核型がすべて非核化してC系列の語声調に合流する改新を起こした諸体系であるとした。複合動詞構成は2単位形式で前部要素のみが関与するとみられるが、隠岐諸方言でのアクセント型は八東方言の2単位形での核の位置によく対応している。八東方言で語頭核となる2類動詞2拍語形が前部要素の複合動詞はC系列、八東方言で次語頭核となる2類動詞3拍語形と1類動詞の2拍語形が前部要素であれば

B系列、3拍目以降に核をもつ複合動詞はA系列である。単純動詞の4拍以上の語形では1類・2類に関わらずA系列となるので、この語長でのB系列とC系列は複合動詞特有のアクセント型ということになる。

本稿の再建仮説では、この体系では下げ核化以前に語頭核が非核化していて名詞3-1/6/7a類の合流も起きていないので、少なくともC系列には非核化による交替形が発生していないと予測される。語彙リストは浦郷（島前）と五箇（島後）の2地点が掲載されているが、このうち、浦郷はこの予測によく合い、前部要素が語頭核となる複合動詞で単純動詞アクセントのA系列で出るのはスミコム、スミナレルの2語のみである。これに対して浦郷のC系列に対応して、五箇では3拍動詞のハイル(AC)、マイル(C)のほか、4拍動詞でA系列の交替形が多く記載されている。ただし、広戸・大原(1953: 168, 174)では、五箇村では名詞も含め、4拍以上のC系列でA系列との混同が多いとしているので、この体系独自の改新と考えて問題がないと思われる。

中国地方の方言の複合動詞アクセントの記述としては、内輪体系と分類される岡山市方言のものが高山林太郎(2012)にある。この体系では八束で観察される2単位形式2種（「二山形」）と無核型複合動詞に、浜田市で観察される後部要素有核の単一化形（「後部中」）が加わり、より複雑な併用状況が記述されているが、無核型の複合動詞の規則的な出現が前部要素2拍の有核型動詞の場合に限り、有核型動詞3拍語形を前部要素とする無核型複合動詞のデータ出現例は、無核型動詞を前部要素とするその出現例と大差がないことが示されている。また、1940年代生まれの話者では、無核型複合動詞がほとんど単一化形に置き換えられていることがわかる。

5. 『京阪系アクセント辞典』の中央式方言

文献史的に京都でたどることのできる変化を児玉(2022)では「境界声調の境界下降化」とそれに続く「上げ核の降り核化」とみた。中央式は、これと同じ変化の結果、語頭核が非核化して語声調(式)に変質したと分析できる諸体系である。この変化の結果、名詞や動詞の連用形では境界下降が核に編入されたとした。この諸体系の京都を中心とする中央部では、さらに、核の位置対立をゆるがす変化(昇格)が起き、動詞・形容詞は事実上、核の有無ではなく式によって型が区別される体系に変質していることを中井幸比古(2004)は詳述している。同書の複合動詞の記述(41-42)も、前部要素の式に応じた系列化した複合動詞アクセントと、この変化を経ていない「周辺部」の複合動詞アクセントを区別したものとなっている。

「周辺部」では、前部要素の動詞連用形が有核かどうかで異なる複合動詞アクセントである。前部要素が有核であれば、後部要素は無核化し、前部要素の核が保存され、前部要素が無核であれば、後部要素の核が保存されるという、文節アクセントと似た統合となる。ただし、降り核化を経た体系では、祖体系で無核の1類動詞も連用形が有核となる。前部要素が無核なのは、

語頭核が非核化した2類動詞の2拍連用形（低起無核）と、連用形が1拍となる1・2類動詞（高起無核）だけである。

この記述から、周辺部では複合動詞アクセントが降り核化後まで2単位形に準ずるアクセント形を保っていたとも分析できそうであるが、注意が必要なのは前部要素と後部要素が共に無核の場合である。後部要素が低起無核2拍の場合には、[デ](*)⁴アウ、キ[リ](*)ダス、キ[リ](*)トルのように、複合の結果として語頭ではなくなった後部要素の（降り）核が保存された音形となる。しかし、後部要素が高起あるいは3拍以上の低起の場合には、[ミマモル、キリヌ[ク、[デアルク、モチアル[クのように、文節接続の場合の付属語と同様の順接となるのである。無核語に無核語が接続する場合の2語構成で後部要素の「式」の弁別が境界で維持されるのと比べると、より1単位化に向けた変化が進んでいるとみられる。

中央式の中央部の複合動詞アクセントは、前部要素が低起(2類動詞2拍連用形と3類動詞アリ[ク、カカエ[ルなど)の場合には、周辺部の低起無核+高起無核、それ以外の場合は、周辺部の高起無核+高起無核と共通の、それぞれ低起無核、高起無核に1語化した複合語アクセントとなる。この改新を、前部要素が核を失い、後部要素が型に関わらず無核となる変化であるとみれば、中輪体系の無核型複合語との関連を検討する必要があることになる。

先述の通り、児玉(2022)では降り核化の結果、境界下降が核に編入されたため、中央式体系では1類動詞と2類動詞が核の位置対立で区別されるようになったと分析した。1類動詞では境界下降に由来する語末降り核、2類動詞では本来の次末降り核である。しかし、動詞の場合は逆に、本来の核が境界下降側に合流し、1類・2類が共に無核とみなされるようになった、という解釈も可能である。中井(2004: 41)によれば、周辺部の複合動詞構成で、前部要素が2類動詞3拍の場合の下降が、しばしば次末拍ではなく語末拍に実現する、としている。位置対立のみが弁別的な「核」であれば許されない揺れである。また、中井(2004)の付属語項目のアクセントの記述によれば、動詞の連用形に接続する付属語の中には、境界下降が現れず、すべての動詞が無核型で接続するものや、テのように、特定の文脈（～テミル）で無核型が接続するものが含まれている。

とすれば、中央式の祖体系の複合語のアクセント統合として、前部要素側のみが語としての性質を保ち境界特徴を示すアクセント形と、境界特徴を削除してより統合が進んだ2形とがある状態があったと想定することもできる。もともと2形が可能で、周辺部と中央部でそれぞれ

⁴ 降り核化を経た中央式では、降り核の音形が下げ核と再解釈された結果として核の位置が前に一拍ずれると考える。この核を降り核としての位置の左側に配し、語頭核として非核化したことを示すために括弧付きの“(*)”で表記する。

一方側のみを選択したのであって、周辺部の体系から中央部の体系が発生したのではない、という考え方である。降り核化によって、2類動詞の語頭核が非核化した結果としての境界下降を欠く低起無核型と、非語頭核をもつ有核型に由来する境界声調をもつ無核型とに前部要素を二分するよう複合動詞アクセント形が再編され、周辺部では、前部要素が1拍あるいは低起2拍の場合以外は境界声調を保ったアクセント形、中央部では境界声調を削除して系列化した統合形が選択された、とみるのである。

この仮定は、中輪式で再建を試みている2単位形と統合形の併存が祖体系まで遡りうる、という仮説に合うものである。しかし、中央式の場合、前部要素が1類動詞か2類動詞かに関わりなく無核型複合動詞が現れる変化を経たのであり、前部要素が2類動詞である場合にのみ起きた中輪式の変化とは結び付けられない個別的な改新であるとみる。

6. 『ケセン語大辞典』の(外)外輪方言

本稿の再建仮説によれば、下げ核化を経していない体系には2類動詞を前部要素とする無核型複合動詞はない、ということになるが、ないことの証明は不可能に近い。しかし、この体系にはないと確信をもてそうな貴重なデータを豊富に提示しているのが、山浦玄嗣(2000)である。大船渡市周辺で話されている「ケセン語」についての200ページ以上の音韻・文法記述を含むアクセント表記・例文付きの大辞典であり、「複合動用詞」(複合動詞)1151語については、構成動詞のアクセント分類に応じて、変則形や例外の解説つきで記述している労作である。

音韻・文法については山浦氏独自の表記や用語が用いられているが、アクセントの記述からは名詞の類別の統合の観点では(外)外輪式であり、核の次音節が卓立する、基本的には上げ核の体系であることがうかがえる。この卓立が、母音の上の *acute accent* で示される。ただし、昇り核として実現する場合もある。ひとつは語末核で、付属語が後続する場合や単独での語形では *accent* のない全低であるが、助詞が後続しないような目的語の位置では、語末母音に *haček* を付して上昇調を示している。下げ核体系の会話で、助詞が脱落して代償延長を受けた語末核音節が「めえ]]つぶって」のように核音節が下降調で発音されたり、助詞が後続しない環境でのコト*、トキ* が降り核でコ]ト*、ト]キ*と実現するのに似ている。もう一つは、上昇を実現すべき核次音節が無声音節になる場合である。上げ核体系から東北北部に広がる昇り核体系に向かう最初の変化が起き始めた段階であると見る。

単純動詞は③型動用詞(1類に相当)では無核(全L)、②型動用詞(2類に相当)は次末核(語末H)型となる。このほかに、①型動用詞として次末拍以前に核をもつ、a*[ri]gu「歩

く)、[[hai*]ru「はいる」, o[[sai*]ru, 「押さえる」 ta*[ma]geru「たまげる」, ma*[di]gau「ま
ちがう」といった派生的な動詞がある。

「複合動用詞」は、前部要素が有核型動詞なら前部要素が核を保持し、後部要素は核を失
う。有核前部要素が（音便によるものを含め）1音節であれば、後部要素の（無声でない）
頭音節にHが置かれる。先に述べた語末核の昇り核的実現は、名詞語末核の上げ核によるH
が語境界を越えて後続の動詞に実現することができないことを示唆するが、複合語の要素間
の境界は、上げ核実現の障壁にはならない。ただし、ta[dag'*]#korosı「たたき殺す」のよう
に、前部要素が2音節以上の場合Hは前部要素側に現れる。

後部要素が無核型動詞であれば、後部要素が核を保持するが、後部要素も無核であれば次
末音節に核が置かれる。無核型複合動詞が許容されない点を除くと、中輪体系での文節アク
セントの構成と似ている。

この原則では無核型複合動詞は存在しないことになるが、実際に現れるものは付録(3)の
「ケセン語複合動用詞 1511 語」では「例外」としてそれぞれの分類に掲載されている。共通
語の対応形に直すと以下のようなものである。

「追い出す」「追いつく」「ひっ切る」「引っ込む」「はっつく」「引っ越す」「引っ張る」
「踏ん張る」「ふんざいなむ」「つつばる」「引っかける」「引っ込める」「踏んづける」
「つつかける」「突っ立てる」「はっつける」「いいつける」「いざる」「着付ける」「寝
ぼける」「煮つける」

いずれも前部要素は1類の動詞であり、東京方言の無核型複合動詞とはまったく対応しな
い。前部要素が音便形のものが多いが、音便形でも有核となるものはかなりあるのでこれが
条件とは見られない。ただし、なぜ前部要素が1類のものに限るのか、という問題は、2類
のものに限る東京方言と同質のものであるといえる。音便形でないものについては、意味的
な複合の透明度が低く「単一の動用詞と見てもいいのかもしれない(山浦 2000: 97)」ものが含
まれている。

一方、予想されない形で現れているもの、つまり、1類動詞で前部支配型、2類動詞で前部
無核型で現れるものは「変則」として掲載されている。

「乗っ切る」「つつころばす」「つんのめる」「つんむくれる」「しはらう」「寝ころぶ」「寝
転がる」（以上、後部頭音節H）

「おもんばかり」「おっぱじく(or'-pazigú)」「おっぱじる(or'-pazirú)」「おっぱじける(or'-pazigerú)」「つきそう」「見通す」(以上、前部要素無核⁵)

これらの「変則」は、先行する時代に起きた何らかの変化の痕跡である可能性も考慮する必要がある。「乗っ切る」等、前部要素が無核型の場合は、他の体系(たとえば八束)で見られる本来は核ではない何らかの境界音調によって2単位が区別された痕跡である可能性もある。後述するように、東日本でもこれに似た複合動詞形成が報告されているものがある。

前部要素の2類動詞の核が失われる「変則」は、上記の「例外」と合わせて、何らかの条件、たとえば前部要素が1音節の場合に、出雲方言のような系列的な語構成があった可能性を示唆するものである。

なお、山浦(2000: 95)には、2類動詞を前部要素とする無核型の「直接従動用詞」がひとつだけ言及されている。「動作の主体に対する敬意を表わす」-yaruである。前部要素が複合動詞など次末核以外の核をもつ有核動詞では核が保持されるが、次末核型の2類動詞や無核型の動詞に接続する場合は前部要素が核を失って無核となる。この場合の無核型は前部要素が1類か2類かに関わらないものであって、おそらく音韻変化ではなく後部支配型の構造を形成する形態変化とみるべきだろう。

7. 『埼玉県東南部方言の記述的研究』の中輪体系

原田伊佐男(2016)は、「埼玉特殊アクセント」と呼ばれる特異な音調で知られる体系の、音韻・文法・語彙を詳述した著作で、語彙については「埼玉県東南部方言語彙集」が付属している。音韻の記述では、服部四郎氏より教示されたとする「深層構造」と「表層構造」に従い、通常(「読書音アクセント」以外の「方言アクセント」)では「核の移動(=一拍後退)」が起きる表層構造側で「核」の位置を論じている。本稿では、この方言に限らず、核は移動せず、核の音声的実現が変化する、という立場をとっている。この体系では、核による下降の開始が遅れ、次次拍でLが実現する、とみなして、氏が下降記号”l”を付している「核」は位置を変えずに”l”で置き換え、「(深層構造の)」核音節は右側に”*”を付して示すことにする。

動詞アクセントは1類動詞が無核型(A類)、2・3類動詞が次末核型(B類)と、東京方言とよく対応しているが、このほかに次末より前に核があり、活用によっても核が動かないC類を立てている。C類はさまざまな構成の複合動詞・派生動詞と、「お*せ]る」(捕まえる)、「た*ま]げる」(以上2語はケセン語参照)「く*さ]る」、「め*え]る」といった単純動詞を含んでいる。「類型的・

⁵ 「けおとす ker'-ódosi」が「変則」に分類されているのは「移動」の誤りか。「おっぱじる」以下の前部要素は「折る」。

文法的なもの」として挙げられているのが、「動詞連用形を前部成分とする複合語」で、本文中の例示は「かじ*り]つく」「こ*き]つかう」「にぎ*り]つぶす」「たた*き]こむ」「にら*み]つける」「ゆわ*い]つける」の6例である。前部要素の次末核が保存され後部要素は核を失う、という、東京方言の前部要素が2類動詞の場合の2単位形と共通のアクセントである。前部要素が2拍のものが1例しかないのは、この方言では必ずしも接頭辞的でないものも含め、2拍連用形が促音便・撥音便形(1音節)で実現することが多いからだと考えられる。本文中では、このような1音節音便形を前部要素とするものは「個別的・語彙的なもの」として分類されている。ここでの掲載例は後部要素4拍の「おっぱ*じ]める」「おった*ま]げる」以外はすべて前部要素側に核があるとみられる音形である。

「埼玉県東南部方言語彙集」に収録されている複合動詞は、「あきれけー*る]～あきれけ*る](p.5)」「くいつ*か]いる～くいつかい*る](p.57)」「くいっち*ら]かす(p.57)」「ほきだす(≡はきだす)(p.160)」の4例を除くと、前部要素がほぼ1音節である。すべてが音便形というわけではなく、「で*お]くれる(p.116)」「めっ*け]る(p.172)」「めっ*か]る(p.172)」(cf. 「ねくじ*る](p.136)」)のように、前部要素が1拍でも2単位形が現れることが確認できる。

これに対して、無核型複合動詞の記載例を挙げる。

「おっぱじまる～おっぱ*じ]まる(p.33)」「おっぱじめる～おっぱ*じ]める(p.33)」「きっかける(p.54)」「切りかける」「けーだす(p.64)」「掻きだす」「とっけす～とっ*け]す(p.124)」「(取り返す)」「とっける～とっ*け]る(p.124)」「(取り換える)」「とっばずす」「(取り外す)」「ぶつかる(p.155)」「ぶつける(p.155)」「ほきだす(再出)」「めっ*か]る～めっか]る(p.172)」「(見つかる)」「めっ*け]る～めっける(p.172)」「(見つける)」

ほぼ東京方言で無核型複合動詞が現れる場合と共通であるが、後部要素有核型と交替する「おっぱじまる」「おっぱじめる」のように、接頭辞化した「おっ」「おん」にはじまる複合動詞や「ぶっ」「ぶん」にはじまる複合動詞は、この例以外では、語彙によって前部要素有核・後部要素語頭核・後部要素次末核のいずれかの有核型で現れる。後部要素の頭音核と次末核の区別は、後部要素が2拍の動詞形では区別できないが、3拍以上の場合には前部要素有核と後部要素頭音核が、活用によって核が動かないC類に分類されることになる。交替がある場合は、前部要素有核の2単位形と次末核型の「おっ*か]ぶさる～おっか]ぶさ*る]」のような、「山田の法則」に反するものが多い。後部頭音核型は本文掲載の2例のほか「おっぴ*る]げる(p.33)」「おっぱ*り]だす(p.33)」がある。

このようなさまざまな型の混在は、「押し」「追い」に由来するとみられる「おっ」「おん」が接頭辞化により動詞としての自立性を失っていることに結び付けられるかもしれない。これ

に対して、「引き」に由来する「しっ～ひっ」「ひん」は、20の掲載例中、前部要素有核のものが「しっ*つあ]ばく～しっつあばく] (p.80)」「しっ*つあ]ぶく～しっつあぶく] (p.80)」の2例、後部語頭核型は「しっく*る]がす(p.79)」「しっく*る]がる(p.79)」「しっく*り]げす～しっく*る]げす(p.79)」「しっく*り]げる～しっく*る]げる(p.79)」「しっち*げ]る(p.79)」（引き違える？）「しっく*る]がる(p.79)」の5例で、その他が次末核型の統合形のみとなる。

この後部語頭核型は、語彙的な複合語だけではなく、構成が透明で規則的に生成される「～は*じ]める」「～お*わる」「～つ*づ]ける」「～や*が]る」にも現れる。前部要素次末拍の核が無核化する後部支配型の複合動詞である。このうち、「～や*が]る」は東京方言でも後部要素頭高型の複合動詞として残存している形である。これは、東京方言の1類動詞を前部要素とする複合動詞にも、後部要素のアクセントに関わらず後部要素頭音節にアクセントを置くような構造があった痕跡ともみなせるかもしれない。全体としてみて、この埼玉県東南部方言の複合語アクセントは、『日本大辞書』の前の段階での東京方言のアクセントをうかがわせる資料としても興味深いと考える。

8. 考察

以上、5つのアクセント記述と語彙アクセント資料のすべてに共通するのは、前部要素のアクセントを残して後部要素が無核化する、という複合語アクセントである。東京方言では『日本大辞書』以降、衰退してしまっただが、前部要素が2類動詞の場合は、ケセン語が唯一の規則形としているのをはじめ、隠岐を含むほぼ全域に認められる。前部要素が1類動詞で無核である場合も、境界下降を残す中央式周辺部や境界近傍に下げ核をおく八東方言では規則的な形であり、また、埼玉県東南部のように、語彙によってはこの形になるものがある。これは、前部支配型の2単位形と呼ぶことができる。

これに対して、東京方言の1類動詞を前部要素とする場合の、後部要素の核を保存する文節構成に似た複合語構成も、ケセン語の1類動詞を前部要素とする場合や、中央式体系周辺部の前部要素が無核となる場合に規則的なのをはじめ、1類動詞だけでなく2類動詞を前部要素とする場合も含めて適用される浜田方言や、東京方言の「後の世代」に広がっている。ただし、注意する必要があるのは、文節アクセントや中央式周辺部では後部要素が無核の場合には無核も保存されるのに対し、他の体系では後部要素が無核の場合には、単純動詞と同じく次末核を置かねばならず、原則として複合語構成には無核型が現れない、という点である。

無核+無核の複合語構成でなぜ核が現れるのか、は、前段で述べた前部支配型の2単位形に求めるのがもっとも妥当ではないかと思われる。八東方言のように、1類動詞が無核型の動詞の場合、境界付近に特定の音調が現れるとする。この音調が八東方言では核による下降と同一

視されているとみた。八東方言で前部要素が2拍以上の場合や、中央式方言の周辺部ではこの境界音調が前部要素に現れる。しかし、後部側、たとえば後部要素頭音節に現れ、これが核になったとした場合、後部要素が語頭核をもつような音形であれば、文節アクセントによって後部要素の核が保存された場合と区別がつかない。また、2類動詞の核は次末拍なので、後部要素が動詞の2拍語形であれば、複合動詞全体が2類の単純動詞として発音されていると解釈されることになる。複合動詞全体の使用例で後部要素が語頭核型（#カ*エス、#カ*エルなどを含む）又は2拍語形で現れる頻度は過半数を超えると考えられるので、それより長い後部要素をもち単純動詞としてはありえない核の位置をもつ複合動詞の核の位置も、有核動詞では本来の位置に、無核動詞の場合は次末拍に移動する形態変化が起きていると考える。埼玉県東南部方言のB型・C型の複合動詞の併存状態はその過程を示していると解釈する。

一方、浜田方言のように、複合動詞アクセントの単一化の一環として次末核型が現れる場合については、必ずしもこのような過程を想定する必要はないかもしれない。たとえば、筆者が聞いた談話音声資料（NHK『全国方言資料』（岩屋・西庄内・臼杵・上野）と国語研『日本語諸方言コーパス』（八幡河内・大分挟間・宇佐））の限りでは、九州の外外輪体系ではほぼ次末核型複合動詞のみが聞かれた。それでも、オチ*]ツイタ や デ*]オータのような境界下降の現れる発話がまじる資料もある。これに対して国語研『方言談話資料』の柏崎の談話音声は、融合形では次末核型複合動詞のみが現れるが、前部要素が1類動詞の場合も含め、前部支配型の2単位形が次末核型の1単位形とほぼ同頻度で現れており、前部要素が1類動詞の場合の境界下降が次末核という再解釈を受ける、という過程を経て生まれた1単位形の有核型が、単一化形として選択された、と説明できそうな体系である。

同じく1単位形として、前部支配型の2単位形から発生したとみられる無核型の複合動詞には、大きく分けて3種類ある。ひとつは系列化を起こしている場合で、この場合は前部要素が無核型動詞の無核型複合動詞となる。有核の前部要素の核は脱落するが、後部要素の次末核に現れる、という、未然形への助動詞承接に似た形態変化である。第2は、中央式のように1類動詞・2類動詞を問わず無核型複合動詞が出る場合で、これは、前部要素の核も境界特徴に変質して、すべての動詞が無核型となり、境界特徴が削除されたものとして説明した。第3が、問題としている「山田の法則」、前部要素が有核の場合にのみ現れる場合である。

第3のケースでの前部要素の核の脱落を形態変化で説明することもできないわけではない。たとえば、中央式のように、境界の前にある前部次末拍の核が境界特徴と認識され、脱落した、と説明する可能性もあるだろう。しかし、後部要素では逆に境界特徴が脱落するのではなく核に変わって安定するという変化を想定することになる。

この非核化を、昇り核化を経た下げ核化を条件とする音韻変化として説明することを試みたのは、まずに、地理的に遠いのにアクセント体系がよく似ている東日本の中輪式体系と中国地方の諸体系で共通に見いだされるからである。本稿の分析で、下げ核化を経ておらず、3-6/7a類が3-7b類と同様に語頭核を維持しているケセン語では、前部要素が有核型の動詞であるような語彙的複合動詞が存在しないことが確認できたので、この仮説は否定されないと考える。もうひとつ、上げ核体系として知られ、3-6/7a類でも語頭核型と無核型が拮抗している奈良田方言についても、『全国方言資料』と『早川町誌付録ソノシート (YouTube 掲載)』の談話音声資料では複合動詞についてはほぼ前部支配型の2単位形での出現しか確認できなかったが、周辺の下げ核中輪体系でも2単位形が主流であり無核型複合動詞は限られた語彙にしか現れないので、下げ核化との有無との因果関係を論ずることはできない。

参考までに、前部支配型の2単位形と無核型複合動詞の交替を確認できた談話音声資料を2つ挙げておく。

- ・ 奈良県十津川方言：国語研『方言談話資料』（複合動詞51例）

前部要素1類動詞：ムスビツカン、ヒキシメテ、オシカケテ、キカエトル

前部要素2類動詞：ナリタツ、オモイツイ]テ/オモ*]イツイテ

- 前部支配型の2単位形も観察される。1類動詞前部要素でツマ]ミアゲテ、ノ]レコシテのような「山の一拍ずれ」を起こしていない発話例がある。
- 中央式（周辺部）の前部要素無核型で後部要素の核が保存される場合に対応する単一形：オチツ*]イタ、ミツ*]ケテ、デオ*]ーテ/デア*]オー

- ・ 愛知県富山方言：国語研『方言談話資料』（複合動詞40例）

前部要素2類動詞：オガミヌイテ/オガ*]ミヌイテ、

トツツカレタ、トツツカレテ/トツ*]ツカレテ、

コキヤーガッテ、(ミヌキ]ヨ) /ミ*]ヌク

- 内外輪方言と考えられる。前部要素1類動詞の交替の出現例としては、ノリオクレ*]タデ/ノリオ*]クレルニのみ。

内輪の十津川方言の「オチツ*]イテ」は、2類動詞の2拍語形が1単位化した複合語前部要素としては語頭核を失った可能性を示唆するデータとなっている。3拍以上の前部要素でこのような有核型後部要素の核を保存する複合動詞形がないことが確認できれば、こちらは、降り核化を経て下げ核化した体系では3拍語の語頭核のうち、核次次音節がHとなる3-6/7b類のそれが非核化した、という音韻変化の3拍以上になる複合動詞での実現例とも見ることができる。

日本語位置アクセントの諸体系で上げ核の下げ核への音韻変化(話者が自覚しない音声の弁別の仕組みの変化)があったことはほぼ確実だと考えるが、その過程で降り核を経由しているか昇り核を経由しているかを結果だけから見分けるのは困難である。3-6/7b類の語頭核の非核化も、2-2類や3-2類の有核化と同じように、どちらの場合でも同じ結果を生じうるからである。本稿冒頭で(1)cについて拡張した音韻変化仮説では、4拍以上の語であれば、「非核化」が語頭核に限るのか、限らないのかがどちらであるかを見分ける有力な傍証となる。しかし、4拍以上の語は、山田美妙が述べているようにほぼ複合語か派生語であって、複合語の起こす変化は形態変化(類推による変化)だろうという解釈が成り立ってしまうため、名詞の類別の変化からうかがえる音韻変化が品詞に関わらず適用されたはずだという可能性がしばしば見落とされてきたのではないかと考える。その中で、形態変化としてとりわけ不自然に見える変化は音韻変化として解釈してみる価値があるということを描き出して、この論考を終える。

参考文献

- 稲垣正幸他(1957)『奈良田の方言』山梨民俗の会。
- 上野善道(1975)「アクセント素の弁別的特徴」『言語の科学』6. 23-65.
- 上野善道(1976)「奈良田のアクセントの所属語彙」『文経論叢』11/3.1-32.
- 上野善道(1985)「香川県伊吹島方言のアクセント」『日本学士院紀要』40(2),75-179
- 上野善道(1988)「下降式アクセントの意味するもの」『東京大学言語学論集'88』35-73.
- 児玉望(2017)「アクセント核はどこから来たか」『熊本大学言語学論集』16.1-34.
- 児玉望(2020)「アクセント核はどう変わるか」『熊本大学人文科学論叢』1.45-64.
- 児玉望(2022)「隠岐三型アクセントはどのように成立したか—「アクセント核はどう変わるか」補説—」『熊本大学言語学論集』22.29-44.
- 高山林太郎(2012)「岡山市方言の複合動詞のアクセント」『東京大学言語学論集』32.305-332.
- 中井幸比古(2002)『京阪系アクセント辞典』勉誠出版。
- 原田伊佐男(2016)『埼玉県東南部方言の記述的研究』くろしお出版。
- 平子達也(2017)「外輪式アクセントの歴史的な位置づけについて」『アジア・アフリカ言語文化研究』94.259-276.
- 広戸惇・大原孝道(1953)『山陰地方のアクセント』報光社。
- 屋名池誠(2004)「平安時代京都方言のアクセント活用」『音声研究』8-2. 46-57.
- 山浦玄嗣(2000)『ケセン語大辞典』無明舎出版。
- 山口幸洋(1985)「東京式諸方言の文節アクセント体系」『国語学』142.23-38.

山田忠雄, 柴田武, 酒井憲二, 倉持保男, 山田明雄, 上野善道, 井島正博, 笹原宏之(2011)『新明解国語辞典第7版』三省堂.

山田美妙『日本大辞書』[1~10巻、第10巻補遺、附録]および『日本大辞書 全 六版』(すべて国立国会図書館デジタルコレクション)

早川町の方言(1980) 4. 奈良田 (『早川町誌』付録ソノシート)

<https://www.youtube.com/watch?v=csGmv8e0ZHw>

国立国語研究所『方言談話資料』(3)「青森、新潟、愛知」 (7)「老年層と若年層との会話」

新潟県柏崎市大字折居字餅根、愛知県北設楽郡富山村中の甲

国立国語研究所『方言談話資料』(8)「老年層と若年層との会話」

奈良県吉野郡十津川村那知合・谷垣内

国立国語研究所『方言談話資料』(9)(10)「場面設定の対話」

新潟県柏崎市大字折居字餅根、愛知県北設楽郡富山村中の甲

奈良県吉野郡十津川村那知合・谷垣内

https://mmsrv.ninjal.ac.jp/hogendanwa_siryoo/ 「『方言談話資料』データ」

(こだまのぞみ 熊本大学)